『真宗文化』第25号平成27年度2016年3月発行（真宗文化研究所）

論　文

支謙訳『義足経』解読研究(三)

京都光華女子大学教授
加治洋一

引き続き、第八経から第十二経の解読を進める。凡例を再掲する。

凡例

一、底本には『大正新修大蔵経』第四巻所収の「佛説義足經」を用いる。ただし、返り点は省略し、パンクチュエーションは部分的に改変した。

二、漢文の書き下しについて。

・できるだけ原文そのままを書き下すが、古典漢文（取り分け支謙の訳文）は、原文のままでは文意をとりづらいことが屢しばある。誤解を招きかねないような箇所には本文にない字句を［　］で補った。

また、会話文には「　」を附した。

・なお、地名や人名など、音写された固有名詞の原語を示すことは、却って煩瑣になるので省略した。

・原則、伝統的な漢文訓読のルールに従うが、時に異なった訓みを採用する。その場合は可能な限り註に根拠を示すこととする。

＊　＊　＊　＊　＊

（179 c）勇辭梵志經[2]第八

佛在舍衞國。當留三月竟。一時於祇樹給孤獨園中。是時墮沙國。諸長者子。共賃一梵志。名勇辭。使之難佛取勝。謝金錢五百。梵志亦一時三月諷五百餘難。難中有變。自謂無勝己者。佛三月竟。從衆比丘欲到墮沙國。轉行郡縣説經。次到墮沙猴猿溪邊高觀殿中。諸長者子即聞佛衆比丘到國。即相聚會合五百餘人。梵志言。佛已到吾國。宜早窮難。梵志即悉從長者子。往到佛所。相勞問便坐一面。長者子中有爲佛作禮者。向佛叉手者。默然者。悉就座。梵志熟視佛威神。甚大巍巍不可與言。便内恐怖懾。不能復語。佛悉知梵志及長者子共議作。便説是義足經。

勇辭梵志經第八

佛、舍衞國に在して、當に三月を留まり竟りたまふべきに、一時、祇樹給孤獨園中に於てましましき。

是の時、墮沙國の諸の長者子、共に一梵志の勇辭と名づくるを賃ひ、之をして佛を難じて勝を取らしめんとし、金錢五百を謝しき。梵志も亦た一時、三月に五百餘の難を諷ぜり。難ずる中に變[4]有りて、自ら「己に勝る者無し」と謂ふ。

佛、三月竟りて、衆比丘を從へ、墮沙國に到らんと欲したまふ。轉た郡縣を行き、經を説きたまふ。次いで、墮沙、猴猿溪の邊りなる高觀殿中に到りたまふ。

諸の長者子、即ち佛と衆比丘との國に到れるを聞き、即ち相ひ聚會して合すること五百餘人なり。梵志言く、「佛、已に吾が國に到れり。宜しく早く窮難すべし」と。

梵志即ち悉く長者子を從へ、往きて佛の所に到り、相ひ勞問し、便ち一面に坐しき。長者子の中に、佛の爲に禮を作す者、佛に向ひて叉手する者、默然たる者有り。悉く座に就けり。梵志、佛の威神を熟視するに、甚だ大いに巍巍たれば、言を與ふ可からず。便ち内に恐怖し懾れて復と語る能はざりき。

佛、悉く梵志と及び長者子との共に議作せるを知し、便ち是の義[5]足經を説きたまひき。

自説淨法無上　餘無法明及我

著所知極快樂(6)　因縁諦住邪學
常在衆欲願勝　愚放言轉相燒(7)
意念義忘本語　轉説難慧所言
於衆中難合義　欲難義當竟句
在衆窮便瞋恚　所難解衆悉善
自所行便生疑　自計非後意悔
語稍疑忘意想(8)　欲邪難正不助
悲憂痛所言短　坐不樂臥喑咋
本邪學致辭意　語不勝轉下意

已見是尚守口(9)　急開閉(10)難從生
意在難見對生　出善聲爲衆光
（180 a）辭悦好生意喜　著歡喜彼自彼
自大可墮漏行(11)　彼不學從何增
已學是莫空諍　不從是善解脱
多倚生痛行司(12)　行求輩欲與難
勇從來去莫慚　令當誰與汝議
抱冥柱欲難曰　汝邪諦自守癡
汝行花不見果　所出語當求義

（1）諸本「勇辭」とするが、『麗蔵』『磧砂蔵』は「祇舜」とする。「辭」の方は、後に「辟」も使われているが、それぞれ「勇」と「辭」の古字、異体字。
（2）宋・元・明の三本は「經」を欠く。
（3）三月　雨安居の期間。丁度雨安居の期間を終えようとしていた、の意。
（4）変　異常な事態。奇瑞。
（5）Cf. Sn. 824-834.
（6）宋・元・明の三本には「在極快」とある。こちらを採ると「極快に在るは」となる。
（7）元・明の二本と『磧砂蔵』とは「遶」とする。こちらを採ると「相ひ遶る」となる。
（8）宋・元・明の三本には「妄意想」とある。こちらを採ると「妄りに意に想ふ」となる。
（9）宋・元・明の三本には「向守口」とある。こちらは「向（すす）みて口を守るべし」と訓む。
（10）宋・元・明の三本は「開開」とする。これは「開き開かば」と訓む。意味は同じ。
（11）宋・元・明の三本には「惰漏行」とある。こちらを採ると「惰（おこた）り行を漏（か）る」と訓む。
（12）宋・元・明の三本には「多倚生痛行同」とある。こちらを採ると、「倚りて生ずること多く　痛の行ずること同じくして」となる。

越邪度轉求明　法義同從相傷
於善法勇何言　彼善惡受莫憂
行億[13]到求到門　意所想去諦思
與大將俱議軍　比螢[15]火上遍明
佛説是義足經竟。比丘悉歡喜

(一)自ら説かく「淨法 無上なり」　「餘に法として明なること我に及ぶもの無し」と
知る所に著きて快樂を極むるは　［自らの］諦に
因縁りて邪學に住せり

(二)常に衆に在りて勝れんと欲願し　愚かに言を放ち
て轉た相ひ燒く
意に義を念じて本の語を忘れ　轉た説きて慧
［者］の言ふ所を難ず

(三)衆中に於て義に合ふを難ずるも　義を難ぜんと欲
せば當に句を竟ぬべし
衆に在りて窮まらば便ち瞋恚するも　難ずる所の
解を衆は悉く善しとす

(四)自らの行ずる所に便ち疑を生じ　自ら「非なり」
と計して後に意に悔ゆ
語りて稍疑ふも意に想へるを忘れ　邪に難ぜんと
欲すれども正しきものは助けず

(五)悲しみ憂へ痛む「言ふ所短し」と　坐して樂まず
臥して喑[16]咋す
本より邪に學べば辭意を致し　「勝らず」と語り
て轉じて意を下す[17]

(六)已に是を見なば尚ほ口を守るべし　急ぎ開閉せば
難　從ひ生ず
意　難ずるに在るも對への生ずるを見なば　善聲
を出して衆の光と爲る

(七)辭　悅好たらば意　喜を生じ　歡喜に著かん「彼な
り」「彼よりなり」と
自ら大いに可とせば漏行に墮す　彼　學ばざるに
何に從ひて增さん
已に是を學べば空しく諍ふこと莫かれ　是に從ひ
て善く解脱するにあらず

(八)倚りて生ずること多く　痛もて行き司ひ　行きて
輩を求めて難を與へんと欲す

勇[者]よ　從ひ來たりて去るも慚ずる莫かれ　今
當に誰をか汝と議せしむべけん
(九)冥柱(18)を抱きて難ぜんと欲して曰ふ「汝の邪なること諦なり、自ら癡を守る」と
「汝 花に行きて果を見ず」「出だす所の語に當に義を求むべし」と
(十)邪を越えて度り轉た明を求むれども　法と義と同じふして從に相ひ傷る
善法に於て　勇[者]よ　何をか言はん　彼の善惡は 受くるとも憂ふること莫かれ
行き億ひ到り門に到らんと求むれども　意に想ふ所 諦思を去れり
大將と俱に軍を議すること　螢火と上なる遍き明との比し
佛、是の義足經を説き竟りたまひしに、比丘悉く歡喜しき。

摩因提女經(19)第九

佛在句留國。縣名悉作法。時有一梵志。字摩因提。生女端正光世少雙。前後國王亦太子及大臣長者來求之。父皆不應。得人類我女者。乃與爲婦。佛時持應器。於縣求食

(13) 宋・元・明の三本には「行意到來到聞」とある。訓みづらいが「行かんとする意もて到り、来たりて到り聞けども」と訓むか。
(14) 宋・元・明の三本は「擧大將俱義軍」とする。「大將を擧げて義軍を俱にす」とでも訓むしかないが、さてそれで文意は通じるか。
(15) 宋・元・明の三本は「螢火上遍明照」とする。こちらの方は節奏（リズム）が崩れた感があるが、「螢火の上なる遍き明照のごとし」とでも訓むか。孰れにせよここの数句は難解。
(16) 喑咋　むせび泣いたり号泣したりすること。
(17) 意を下す　今は「落胆する」ほどの意か。
(18) 冥柱　何となくイメージはできるが、未詳。
(19) 宋・元・明の三本は「經」を欠く。

食竟盥澡藏應器。出城到樹間閑靜處坐。摩因提。食後出行園田道經樹間。便見佛金色身。有三十二相。如日月。王自念言。持女比是大尊。如此人比我女。便還家謂婦言。兒母寧知得所願不。今得婿踰於女。母聞亦喜。即莊飾女。衆寶瓔珞。父母俱將女出城。母見佛行迹。文現分明。謂父言。寧知空出終不得婿。何故。婦説偈言。

姪人曳踵行　恚者斂指歩
癡人足踝地　是迹天人尊［地恐弛之錯］[21]

摩因提女經第九

佛、句留國の縣、悉作法[22]と名づくるに在しき。

時に、一梵志有り。字は摩因提なり。女の端正なるを生ず。光くこと世に雙ぶもの少し。前後の國王も亦た太子と及び大臣・長者も來りて之を求むれども、父皆應ぜず。「人にして我が女に類ぶ者を得なば、乃ち與へて婦と爲さん」と。

佛、時に、應器を持ち、縣に於て食を求めたまふ。食し竟り盥澡して應器を藏め、城を出て樹間に到り、閑靜の處に坐したまふ。

摩因提、食後に出て園田の道を行き、樹間を經て、便ち佛の金色なる身を見る。三十二相有りて日月の如し。王自ら念言すらく、「持てる女は是の大尊に比ぶ。此くの如き人は我が女に比べり」と。便ち家に還りて婦に謂ひて言く、「兒母。寧ろ願ふ所を得たるを知るや不や。今、婿の、女を踰ゆるを得たり」と。母聞きて亦た喜び、即ち女に衆寶瓔珞を莊飾せり。父母俱に女を將ゐて城を出づ。母、佛の行迹を見るに文現れて分明なり。父に謂ひて言く、「寧ろ空しく出て、終に婿を得ざるを知れり」と。［父曰く］「何が故ぞ」と。婦、偈を説きて言く、

姪人は踵を曳きて行き
恚者は指を斂めて歩き
癡人は地を足踝すれども
是の迹は天人の尊なり［地恐れて之を弛べて錯んず］

父言。癡人莫還爲女作患。女必得婿。即將女到佛所左手

持臂。右手持瓶。因白佛。（180 b）今以女相惠可爲妾[23]。女見佛形状端正無比。以三十二相。瓔珞其身。如明月珠。便姪意繫著佛。佛知其意如火燃。佛即時説是義足經言。

父言く、「癡人。還と女の爲に患を作す莫かれ。女は必ず婿を得ん」と。即ち女を將ゐて佛の所に到り、左手に［女の］臂を持ち、右手に瓶を持ちて、因て佛に白さく、「今女[24]を以て相ひ惠まん。妾と爲す可し」と。女、佛の形状の端正無比にして、三十二相を以て瓔珞とし、その身の明月珠の如くなるを見て、便ち姪意もて佛に繫著せり。佛、その意の火の如く燃[25]ゆるを知し、佛、即時に是の義[26]足經を説きて言ひき。

我本見邪三女　尚不欲著邪姪
今奈何抱屎尿　以足觸尚不可
我所説姪不欲　無法行不内觀
雖聞惡不受厭　内不止不計苦
見外好筋皮裹　尊云何當受是
内外行覺觀是　於黠邊説癡行
亦見聞不爲黠　戒行具未爲淨
不見聞亦不癡　不離行可自淨
有是想棄莫受　有莫説守口行
彼五惱聞見棄　慧戒行莫[27]姪淨

（20）宋・元・明の三本は「足蹋地」とする。「足踝地」は裸足で歩くこと。「足蹋地」は「足もて地を蹋む」と訓む。
（21）『大正』は「地恐弛之錯」の五文字を割注で入れるが、宋・元・明の三本は欠く。
（22）悉作法　地名。Kammāssadhamma. 漢訳仏典では、固有名詞を意訳することはしばしば見られる翻訳作法である。
（23）宋・元・明の三本は「妻」とする。
（24）原文は「以女相惠」。この「以」は目的語を先行させる助辞。「女」が「惠」の目的語であることを示す。また、この「相」は「お互いに」の意味ではない。下接する語が動詞であり、動作が対象に及ぶことを示す接頭辞。「娘をあなたに差し上げます」ほどの意。
（25）『大正』は「燃」とするが、宋・元・明の三本には「然」とある。同義。
（26）Cf. Sn. 835-847.
（27）宋・元・明の三本には「莫望淨」とある。こちらは「淨を望むこと莫かれ」と訓む。

世所見莫行癡　無戒行彼想有
可我有墮冥法　以見可誰有淨
諦見聞爾可謂　諦意取可向道
往到彼少不想　今奈何口欺尊
等亦過亦不及　已著想便分別
不等三當何諍　悉已斷不空計
有諦人當何言　已著空誰有諍
邪亦正悉無有　從何言得其短
捨欲海度莫念　於隙縣忍行黠
欲已空止念想　世邪毒伏不生
悉遠世求[28]敗苦　尊言離莫與俱
如水華淨無泥　重塵土不爲萎
尊安爾無所貪　於世俗無所著
亦不轉所念想　行如度不[29]隨識
三不作墮行去　捨不教三世事
（180 c）捨不想無有縛　從黠解終不懈
制見想餘不取　便厭聲歩三界
佛説是義足經竟。比丘悉歡喜。

㈠我れ本邪なる三女[30]を見しも　尚ほ邪婬に著くを欲せず
今奈何が屎尿[31]を抱かん　足を以て觸るるも尚ほ可とせず
㈡我が説く所は「婬は欲せざれ」となり　法行として内觀せざる無し
惡を聞くと雖も受けずして厭ひ　内に止めずば苦と計せず
㈢外の好き筋皮の裏を見て　尊は云何が當に是を受くべき
内外の行もて是を覺觀し　黠の邊りに於て「癡行なり」と説く
㈣亦た見聞すれども黠と爲さず　戒行具ふれども未だ淨と爲さず
見聞せざれども亦た癡とせず　行を離れずば自ら淨たる可し
㈤是の想を有ちて棄てて受くること莫かれ　有ちて説く莫く口行を守るべし
彼の五[32]惱は聞見して棄つるも　慧と戒行もて淨に

姪する莫かれ

(六)世の見る所に癡を行ずる莫かれ　戒行無くして彼の想有らば

我れに冥に墮する法有る可し　見を以ては誰に淨有る可けん

(七)諦かに見聞せよ　爾して謂ふ可し　諦かに意取せよ　［爾して］道を向む可し

彼こに往き到るも少しも想はず　今奈何ぞ口に尊を欺くや

(八)等しきも亦た過ぐるも亦た及ばざるも　已に想に著せば便ち分別す

(33)三に等しからずば當に何をか諍ふべき　悉く已に斷ぜば空しく計せず

(九)諦有る人は當に何をか言ふべき　已に著 空しければ誰にか諍ひ有らん

邪も亦た正も悉く有る無きに　何に從ひて言はん

「其の短を得たり」と

(十)欲の海を捨て　度りて念ずる莫し　隰縣に於て忍行せば黠あり

欲已に空しければ念想を止め　世の邪毒は伏して生ぜず

悉く世を遠け苦を敗ることを求め　尊は離を言ふ

(28) 宋・元・明の三本には「求敗善」とある。読みづらいが、「敗るを求むること善くし」と訓むか。

(29) 宋・元・明の三本には「不墮識」とある。「識に墮せず」と訓む。

(30) 三女　ブッダの悟りの座に現れた三人の魔女を指すか。

(31) 屎尿　愛欲を戒めるために、仏典中屢しば人身を糞尿の袋に喩える。

(32) 五脳　不詳。言葉の対応ということだけなら『長阿含十報法經』に「若行者有親厚有者。已施惡已施不安已施侵已施餘惡。若行者向念。是從是生惱。是爲五惱」（『大正』巻一 239 b）とあるが、今の文脈とはあまり関係がなさそうである。仏・法・僧を疑うという意味では、却ってパーリの *Saṅgīti-sutta* などに現れる pañca-cetokhila などの方が相応しいが、これを「五脳」とは訳しそうにない。孰れにせよ、今は五種類で纏められる煩悩ほどに考えておけば文脈上困難はないが、識者のご教示を乞う。

(33) 三　前行の「等」と「過」と「不及」の三。

「與俱（とも）なること莫かれ」と

㈡水華の淨にして泥無く　塵土を重ぬるも萎を爲さざるが如く

尊の安んずるも爾り　貪ぼる所無く　世俗に於て著する所無し

㈢亦た念想する所に轉ぜられず　行ずること度るが如くにして識に隨はず

三たび作さずんば墮するより行き去り　捨てて三世の事を教へず

㈢捨てて想はざれば縛有る無し　黠に從ひて解せば終に懈（おこた）らず

見を制して想ひ餘を取らずば　便ち聲を厭ひて三界を歩まん

佛、是の義足經を説き竟りたまふに、比丘、悉く歡喜しき

異學角飛經第十

聞如是。佛在王舍國多鳥竹園中。爲國王大臣長者人民所敬事。以飯食衣被臥床疾藥。共所當得。時梵志六世尊。不蘭迦葉。俱舍摩却梨子。先跪鳩墮羅知子。稽舍今陂梨。羅謂娑加遮延。尼焉若提子。[35]是六尊亦餘梵志。共在講堂議言。我曹本爲世尊。國王人所待敬。云何今棄不復見用。悉反承事沙門瞿曇及弟子。念是釋家子。年尚少學日淺。何能勝我曹。但當與共試道。乃[36]知勝不耳。至使瞿曇作一變。我曹作二。瞿曇作十六。我曹作三十二。轉倍之耳。便共與頻沙王近親大臣語重謝。令達我曹所議變意大臣即便宜[37]白王如語。王聞大瞋恚。數諫通語臣已。便還歸里舍。

異學角飛經第十

聞きしこと是くの如し。佛、王舍國　多鳥竹園中に在（ましま）しき。國王・大臣・長者・人民の敬事する所と爲り、飯食・衣被・臥床・疾藥を以て、當に得べき所を共へ（そな）[38]らる。

時に梵志　六、世に尊ばる。不蘭迦葉、俱舍摩却梨子、先跪鳩墮羅知子、稽舍今陂梨、羅謂娑加遮延、尼焉若提

子、是の六尊なり。亦た餘の梵志も共に講堂に在りて議言す。「我曹、本、世の尊爲りて、國王・人の待敬する所なりしに、云何が今棄てられ復[39]と用ゐられざる」「悉く反きて沙門瞿曇と及び弟子とに承事すればなり」「是の釋家の子を念ふに、年尚ほ少く、學びて日淺し。何ぞ能く我曹に勝らんや。但だ當に與共に道を試し、乃ち勝るか不かを知るべきのみ。使を至さん。瞿曇一變を作さば、我曹二を作さん。瞿曇十六を作さば、我曹三十二を作さん。轉た之を倍するのみ」と。

便ち共に頻沙王の近親の大臣に與して語る。「重ねて謝せん。我曹の議する所を達して［王の］意を變ぜしめよ。大臣、即便ち宜しく王に白すこと語るが如くすべし」と。

王聞きて大いに瞋恚して數しば諫め、語を臣に通じ已りて便ち［臣をして］里舍に還歸せしむ。

衆梵志忽見佛獨得待敬巍巍。便行到王宮門。上書具説變意。王即現所尊六人向瞋恚大罵。王已見諦。得果自證。終不信異學所爲。便謂傍臣。急將是梵志釋。逐出我國界去。梵志見逐。便相將到舍衞國。佛於王舍國教授竟。悉從衆比丘。轉到郡縣。次還舍衞國祇[40]桓中。梵志等不忍見佛得敬巍巍。便聚會六師。從諸異學。到波[41]私匿王所。具説其變意。王即聽之。便乘騎到佛所。頭面著佛足竟一面坐。叉手求願。諾世尊道德深妙。可現變化。使未聞見者

(34) 宋・元・明の三本は「掩」とする。
(35) 宋・元・明の三本は「尼烏若提子」とする。
(36) 宋・元・明の三本は「乃知勝弱耳」とする。「乃ち勝か弱かを知るべきのみ」。
(37) 明本は「宣」とする。こちらを採ると、梵志の言ったことではなく、「王に宣じ白すこと語るが如くす」となる。どちらでも文脈上問題ない。
(38) 共へらる　今は「供」と同義。
(39) 原文は「不復見用」。この「見」は受け身の助辞。
(40) 宋・元・明の三本は「祇洹」。
(41) 明本は「波斯匿」。

生信意。已聞見者重解。使（181 a）異學無餘語。佛語王言。却後七日。當作變化。王聞歡喜。繞佛三匝而去。至期日。便爲作十萬坐床。亦復爲不蘭等。作十萬坐床息。時舍衞人民。悉空城出觀。佛出威神。時梵志等。便各就座。王起白佛。諾世尊。可就座現威神。

衆の梵志、忽ち佛の獨り待敬せらるること巍巍たるを得るを見て、便ち行きて王宮の門に到り、書を上りて具に説かく、「意を變じたまへ」と。王即ち所尊の六人に現れ、向ひて瞋恚し大罵す。王、已に諦を見、果を得て自ら證すれば、終に異學の爲す所を信ぜざればなり。便ち傍臣に謂く、「急ぎ是の梵志を將ゐて釋ち、我が國界より逐ひ出し去らしめよ」と。梵志逐はれて、便ち相ひ將けて舍衞國に到れり。

佛、王舍國に於て教授し竟り、悉く衆比丘を從へ轉た郡縣に到り、次で舍衞國祇桓中に還りたまふ。

梵志等、佛の敬はるるを得ること巍巍たるを見るを忍びず、便ち會を聚む。、六師　諸の異學を從へて波私匿王の所に到り、具に説かく、「其れ意を變ぜよ」と。王即ち之を聽きて、便ち騎に乘りて佛の所に到る。頭面もて佛の足に著け竟り、一面に坐し、叉手して願の諾さるるを求む。「世尊は道德深妙なれば、變化を現して、未だ聞見せざる者をして信意を生ぜしめ、已に聞見せる者は重ねて解せしめ、異學をして餘語無からしめたまふ可し」と。佛、王に語りて言はく、「却後七日に當に變化を作すべし」と。王聞きて歡喜し、佛を繞ること三匝にして去りき。

期日に至り、便ち十萬の坐床を爲作し、亦復た不蘭等の爲に十萬の坐床を作りて息みたまふ。時に舍衞の人民、悉く城を空しくして、出て佛の威神を出したまふを觀んとす。

時に梵志等、便ち各おの座に就けば、王起ちて佛に白す。「諾したまへ、世尊。座に就きて威神を現したまふ可し」と。

是時般識鬼將軍適來禮佛。聞梵志欲與佛揵道。便作飄風雨吹其座。復雨沙礫。上至梵志膝者至髀者。佛便出小威神。使其座中悉火燃。炎動八方。不蘭等見佛座燃如是。

悉歡喜自謂道德使燃。(44) 佛現神竟。炎燃則滅梵志等乃知非其神所爲。便向内憂有悔意。佛即起師子座。中有一清信女。有神足。起叉手白佛言。世尊不宜勞神。我欲與異學俱現神。佛言。不須自就座。吾自現神足。貧賤清信士須達女作沙彌。名專華色。與目揵蘭俱往白佛。世尊不宜勞威神。我今願與之共揄道。佛言不須且自還座。我自現神足。佛意欲使衆人得福安隱。悉愍人天令得解脱。復伏梵志等。亦爲後世學者作慧。使我道於未來(45)得住留。

是の時、般識鬼(46)將軍、適たま來たりて佛を禮し、梵志の、佛と揄道(47)せんと欲するを聞き、便ち飄風(48)雨を作りてその座を吹かしめ、復た沙礫を雨らし、上は梵志の膝に至る者、髀に至る者あり。佛、便ち小なる威神を出し、その座中に悉く火をして燃えしめ、炎をして八方に動かしめたまへり。不蘭等、佛の座の燃ゆること是くの如きなるを見て、悉く歡喜して自ら謂く、「道德もて燃えしめり」と。佛、神[力]を現し竟りたまへば、炎燃則ち滅せり。梵志等乃ちその神[力]の爲す所に非ざるを知り、便ち内に向(おい)て憂え、悔意有り。佛、即ち師子座より起ちたまふ。

中に一清信女有り。神足有り。起ちて叉手し、佛に白して言さく、「世尊。宜しく神[力]を勞したまふべからず。我、異學と俱に神[力]を現ぜんと欲す」と。佛言(のたまは)く、「須ゐざれ。自ら座に就け。吾自ら神足を現さん」と。

貧賤なる清信士、須達の女(むすめ)、沙彌と作り、專華色と名

(42) 宋・元・明の三本には「座」とある。以下名詞の場合は同様。
(43) 忽ち　予期していなかったことを示す。今は「思いもかけず」ほどの意。「突然」ではない。
(44) 宋・元・明の三本には「然」とある。同義。
(45) 宋・元・明の三本は「未來時」とする。
(46) 般識鬼　Pāñcika. 藥叉の一。
(47) 揄道　「揄」は、角を押さえて獣を取り押さえること。「揄道」はここでは、技競べ、術比べほどの意か。
(48) 飄風　大風、暴風のこと。

づく。目揵蘭と倶に往きて佛に白さく、「世尊。宜しく威神を勞したまふべからず。我、今願くは之と共に揶道せん」と。佛言く、「須ゐざれ。且く自ら座に還るべし。我自ら神足を現ぜん」と。

佛、意に「衆人をして福・安隱を得しめ、悉く人天を愍みて解脱を得しめ、復た梵志等を伏して亦た後世の學者の爲に慧と作り、我が道をして未來に於て住留することを得しめん」と欲したまへばなり。

佛時現大變神足。卽[49]從師子座飛起。往東方虛空中歩行。亦箕坐猗[50]右脇。便著火定神足。出五色光。悉令作雜色。下身出火。上身出水。上身出火。下身出水。卽滅乃從南方來。復滅乃從西方來。復滅乃從北方虛空中住。變化所作。亦如上説。坐虛空中。兩肩各出一百葉蓮花。頭上出千葉華[51]。華上有佛坐禪。光明悉照十方。天人亦在空中。散花佛上。皆（181b）言。善哉佛威神悉動十方。佛卽攝神足。還師子座。是時梵志等默然無言[52]。皆低頭如鳩睡。

佛、時に大變神足を現じ、卽ち師子座より飛び起ち、東方に往きて虛空中を歩行し、亦た箕坐して右脇に猗り、便ち火定に著き、神足もて五色の光を出して悉く雜色を作らしめたまふ。下身より火を出し、上身より水を出し、上身より火を出し、下身より水を出したまひて卽ち滅し、乃ち南方より來りたまふ。復た滅して乃ち西方より來り、復た滅して乃ち北方より［來りて］虛空中に住したまふ。變化して作したまふ所、亦た上に説くが如し。虛空中に坐して、兩肩より各おの一百の葉蓮花を出し、頭上より千葉華を出したまふ。華の上に佛有りて坐禪したまふ。光明悉く十方を照らす。天人も亦た空中に在りて、佛の上に散花す。

皆言く、「善きかな。佛の威神、悉く十方を動かしたまふ」と。佛卽ち神足を攝めて師子座に還りたまふ。是の時、梵志等、默然として言無く、皆頭を低[た]るること鳩の睡るが如し。

時持和夷鐵。便飛於虛空。見炎[53]烱然可畏。但使梵志等見耳。適現子曹。便大恐怖戰慄。衣毛皆竪各各走。佛便爲

雨衆人。廣説經法。説布施持戒善見天徑。[54]薄説愛欲好痛[55]説其災害著苦無堅固。佛以慧意知衆人意濡[56]住不轉。便爲説四諦。中有身歸佛者。歸法者。歸比丘僧者。有長跪者受戒者。有得溝港者。得頻來者。得不還者。是時人民皆共生意。疑何因縁棄家爲道。復有鬥訟。佛即知子曹疑。便化作一佛著前。端正有三十二相衣法衣。弟子亦能化作[57]人。化人語弟子亦語。佛語化人默然。化人語佛默然。何以故。正覺直度正所意故。化佛即右膝著地。向佛叉手。以偈難問言。

時に、［佛］和夷鐵[58]を持ちて便ち虚空を飛び、炎の烱然たること畏る可きを見はし、但だ梵志等をして見せしめたまふのみ。適きて子曹に現ずれば、便ち大いに恐怖戰慄し、衣毛皆な竪ちて各各走る。佛、便ち爲に、衆人に雨らすがごとく、廣く經法を説きたまふ。布施・持戒・善見天徑[59]を説き、薄か愛欲の痛[60]を好むを説き、其の

(49) 宋・元・明の三本は「即」を欠く。
(50) 宋・元・明の三本は「倚」とする。今は同義。
(51) 宋・元・明の三本は「蓮華」とする。
(52) 宋・元・明の三本は「願」に作る。「默然として願ひ無く」。
(53) 宋・元・明の三本は「炎煙」とする。「炎煙の然ゆること」。
(54) 宋・元・明の三本は「兩」に作る。こちらだと「佛便ち兩衆の人の爲に廣く經法を説きたまふ」となり、この方が訓みやすい。「兩衆人」は、不蘭等の集団と、舍衛城から参加している人びとの二つの集団の人びと、の意。
(55) 宋・元の二本は「薄」の氵部分を忄に作るが、手元の辞書には見当たらない。『大正』の脚注も活字が無く、作字している。写誤か。
(56) 宋・元・明の三本は「濡」を「輭」に作る。「輭（やはら）けく」。
(57) 宋・元・明の三本は「作化人」とする。「化人を作れども」。
(58) 和夷鐵 vajra. 金剛杵。
(59) 善見天徑 善見天に到る道。即ち生天論を説いた、ということ。仏は初心者に対する導引の教えとして、先ず施論・戒論・生天論を説いたとされる。
(60) 「薄」は「博」にも通じるので「ひろく」とも訓める。
(61) 痛 vedanā の訳。後は「受」が定訳語。

災害の苦に著き堅固なる無きを説きたまふ。佛、慧を以て、意に、衆人の意の濡ぎ住して轉ぜざるを知し、便ち爲に四諦を説きたまふ。

中に、身ら佛に歸する者、法に歸する者、比丘僧に歸する者有り。長跪する者、戒を受くる者有り。溝港を得る者、頻來を得る者、不還を得る者有り。

是の時、人民、皆な共に意を生じて疑ふらく、「何の因縁もて、家を棄てて道を爲すに復た鬥訟有りや」と。佛即ち子曹の疑ひを知し、便ち一佛を化作して前に著かしめたまふ。端正にして三十二相有り、法衣を衣る。弟子も亦た能く人を化作すれども、化人語れば弟子も亦た語る。佛語りたまへば化人默然たり、化人語れば佛默然たり。何の以故に。正覺は直ちに度して意とする所を正すが故なり。化佛即ち右膝もて地に著け、佛に向ひて叉手し、偈を以て難問して言く、

鬥訟變何從起　致憂痛轉相疾
起妄語轉相毀　本從起願説佛
坐憂可起變訟　轉相嫉致憂痛
欲相毀起妄語　以相毀鬥訟本
世可愛何從起　轉世間何所貪
從置有不復欲　從不復轉行受
本所欲著世愛　以利是轉行苦
不捨有從是起　以故轉後復有
隨世欲本何起　從何得別善惡
從何有起本末　所制法沙門説
亦是世所有無　是因縁便欲生
見盛色從何盡　世人悉分別作
（181c）所從欺有疑意　亦是法雨面受
念從何學慧迹　願解法明學説
所有無本從何　無所親從何滅
盛亦滅悉一義　願説是解現本
有亦無著細濡　去來滅無所有
盛亦滅義從是　解現賢本盡是
世細濡本從何　著世色從何起
從何念不計著　何因縁著可色
名色授著細濡　本有有色便起
寧度癡得解脱　因縁色著細濡

從何得捨好色　從衆愛從何起
所著心寧悉盡　諦行知如解脱
不想想不色想　非無想不行想
一切斷(68)不著者　因想本戯(69)隨苦
我所問悉已解　今更問願復説
行涇(70)悉成具足　設無不勝尊徳
是極正有何邪　向徑(71)神得果慧
尊行定樹林間　無有餘最善説
知如是一心向　尊已著不戒行
疾行問度世間　斷世捨是彼身〈/ver〉
佛説是義足經竟。比丘悉歡喜

(一)(72)鬥訟に變ずるは何によりてか起こる　憂・痛を致して轉じて相ひ疾(にく)み
妄語を起こして轉じて相ひ毀(そし)る　本づき從ひ起こるを　願はくは説きたまへ、佛(73)
(二)憂と可[愛]とに坐(よ)り起きて訟に變ず　轉じて相ひ嫉み憂・痛を致す

(62) 溝港　預流。
(63) 頻來　一来。
(64) Cf. Sn. 862-877.
(65) 宋・元・明の三本は「嫉」とする。「嫉(ねた)み」。
(66) 宋・元・明の三本は「兩」。註74を参照されたし。
(67) 宋・元・明の三本は「輭」。
(68) 宋・元・明の三本は「想斷不著」とする。「一切想断じて著かず」。
(69) 宋・元・明の三本は「虧」とする。こちらは「虧けて」と訓む。「損なわれて」ほどの意。
(70) 『磧砂蔵』には「湮」とある。いずれも難解。取り敢えず『大正』の「涇」を採り、本文のように訓んでおく。
(71) 宋・元・明の三本は「経」とする。註77を参照されたい。
(72) 以下、化仏と仏との問答の形を取る。(一)(三)(五)(八)(十)(十三)(十五)が化仏。
(73) 仏に対する呼びかけ。或いは、研究会参加者の一人が言ったように、「本づき從ひ起これり　願はくは佛を説きたまはんことを」と訓んで「佛」を bodhi の意味に取ることも可能か。

相ひ毀らんと欲し妄語を起こす　相ひ毀るを以て
鬥訟の本あり

(三)世の可愛は何によりてか起こる　轉(うた)た世間に何を
か貪ぼる所ぞ
有を置くにより復た欲せず　復た[欲]せざるによ
りて轉た行きて受くや

(四)本欲する所　世愛に著き　是れを利せんとするを
以て轉じて苦に行く
有を捨てずば是れによりて起こる　以故(かるがゆゑ)に轉じて後
に復た有り

(五)世に隨ひて欲は何に本づき起こり　何によりて善
惡を別つを得ん
何によりて本末を起こす有りや　所制の法は沙門
の説けるか

(六)亦た是の世の「有り」「無し」とする所　是の因
縁もて便ち欲生ず
盛色の何によりて盡くるかを見て　世人悉く分別
して［有り無しと］作す

(七)欺に從ふ所に疑意有るも　亦た是の法は両面(74)に受
くればなり
何に從ふかを念じ慧の迹を學べ　法を解するを願ひ
學(75)の説くを明かにせよ

(八)有り無しとする所　本何に從ふや　親(もと)とする所無
くんば何に從ひて滅すや
盛んなるも亦た滅するも悉く一義ならん　願くは是
を説き現の本を解きたまはんことを

(九)有も亦た無も細(76)濡に著く　去來し滅せば所有無け
ん
盛も亦た滅も義は是に從ふ　現を解する賢は本よ
り是を盡くせり

(十)世の細濡は本何に從ふ　世の色に著するは何より
起こる
何に從ひて念ぜば計著せざる　何の因縁もて可
［愛］の色に著す

(十一)名色授くれば細濡に著す　本有有れば色便ち起こ
る
寧(ねんごろ)に癡を度せば解脱を得　色を因縁として細濡に
著す

㊤何によりて好色を捨つるを得ん　衆愛によるは何によりて起こる
著する所の心は寧ぞ悉く盡くる　諦かに行じ知れば解脱するが如くなりや
㊥想想なく色想なく　無想に非ず行想なく
一切斷ぜば著せざる者なり　想の本に因りて戯れ苦に隨へばなり
㊦我が問ふ所　悉く已に解きたまへり　今 更に問はん　願はくは復た説きたまはんことを
行じ湮（しの）げば悉く具足を成ずや　設し尊德に勝らざる無きも
㊧是れ極て正なれば何の邪か有らん　徑（みち）に向へば神すら果慧を得
尊は定を樹林の間に行じ　餘有ること無く最も善く説きたまふ
㊨知ること是くの如くにして一心に向かひ　尊は著するを已（や）め戒行したまはず
疾（と）く行きて世間を度するを問へ　世を斷じて捨てたる　是れ彼の身なり
佛、是の義足經を説き竟りたまひしに、比丘悉く歡喜しき。

（181 c）猛觀梵志經（78）第十一

聞如是。佛在釋國迦維羅衛樹下（79）。（182 a）從五百比丘。

---

(74)『大正』は「雨」とするが、宋・元・明の三本には「両」とある。取り敢えず三本に従う。有無の両面の意。「雨」では訓みづらい。
(75) 學　有学。修行者。
(76) 細濡　sparsa, phassa の訳。後には「触」が定訳語。
(77) 徑　ここでは仏道を意味するか。但し宋・元・明の三本には「經」とある。こちらは「經に向（おい）て」。
(78) 宋元明の三本は「經」を欠く。本経から下巻に入る。
(79) 宋元の二本は「迦隨羅衛」とする。孰れにせよ kapilavatthu の写音訳。

悉應眞所作已具。已下重擔。聞義已度。所之生胎滅盡。是時十方天下地神妙天來佛所。欲見尊德及比丘僧。是時梵四天王相謂言。諸學人寧知。佛在釋國迦維羅衞樹下。從五百眞人。復十方天地諸神妙天。悉來禮佛。欲見尊威神及諸比丘。我今何不往見其威神。四天王即從第七天飛下。譬如壯士屈伸臂頃。來到佛邊。去尊(80)不遠。便俱往禮佛及比丘僧。各就座。

猛觀梵志經第十一

聞きしこと是くの如し。佛、釋國迦維羅衞の樹下に在(ましま)しき。五百の比丘を從へたまふ。悉く應眞(81)の所作已に具はりて已に重擔を下し、義を聞きて已に度し、之(ゆ)きて生ずる所の胎　滅盡せり。

是の時、十方天下の地の神妙なる天、佛の所(みもと)に來り、尊德と及び比丘僧とに見(まみ)えんと欲す。

是の時、梵と四天王、相ひ謂ひて言く、「諸の學人、寧ろ知れりや。佛、釋國迦維羅衞の樹下に在して、五百の眞(82)人を從へたまふを。復た十方天地の諸の神妙なる天、悉く來たりて佛に禮し、尊の威神と及び諸比丘とに見えんと欲するを。我れ今、何ぞ往きてその威神を見ざる」と。四天王即ち第七天より飛び下ること、譬へば壯士の臂を屈伸する頃(あひだ)の如し。來たりて佛の邊りに到ること、尊を去ること遠からず。便ち俱に往きて佛と及び比丘僧とに禮し、各おの座に就きき。

一梵天就座。便説偈言

今大會於樹間　來見尊皆神天
今我來欲聽法　願復見無極衆

二梵天適就座便説偈言

在是學當制意　直學行知身正
如御者善兩轡　護眼根行覺意

三梵天就座便説偈言

力斷七伏邪連　意著止如鐵根
捨世觀淨無垢　慧眼明意而攝

四梵天就座便説偈言

有以身歸明尊　終不生到邪冥
捨人形後轉生　受天身稍離患

［第］一の梵天、座に就き、便ち偈を説きて言はく、

今大會　樹間に於てあり　　來りて尊に見ゆるは皆
神天なり
今我來りて法を聽かんと欲す　　願くは復た無極の
衆を見んことを

［第］二の梵天、適きて座に就き便ち偈を説きて言はく、

是に在て學ばん　當に意を制すべきを　　直ちに行
を學び身の正しきを知らん
御者の如く兩轡を善くし　　眼根を護り覺意を行ぜ
ん

［第］三の梵天、座に就きて便ち偈を説きて言はく、

力もて七を斷じ邪連を伏せん　　意の止に著くこと
鐵根の如くせん
世を捨てて觀ぜん　淨にして無垢なるを　　慧眼明
かならば意而ち攝まらん

［第］四の梵天、座に就きて便ち偈を説きて言はく、

身を以て明尊に歸する有らば　　終に生じて邪冥に
到らず
人形を捨てて後に轉生し　　天身を受けて稍く患を
離れん

是時坐(83)中有梵志。名爲猛觀亦在大衆中。意生疑信因縁。

(80) 宋・元・明の三本は「尊」を欠く。
(81) 應眞　阿羅漢。
(82) 眞人　阿羅漢。
(83) 宋・元・明の三本は「座」。

佛知猛觀梵志所生疑。是時便作一佛。端正形類無比。見者悉喜。有三十二大人相。金色復有光衣法大衣亦如上說。便向佛叉手以偈歎言

人各[84]念彼亦知　各欲勝慧可說
有能知盡是法　遍行求莫隅解
取如是便生變　癡計彼我善慧

（182 b）至誠言云爲等　一切是善言說

不知彼有法無　冥無慧[85]隨彼黠
冥一切痛遠黠　所念行悉彼有
先計念却行說　慧已淨意善念
是悉不望黠減　悉所念著意止
我不据是悉上　愚可行轉相牽
自見謹謂可諦　自已癡復受彼
自說法度無及　以自空貪來盜
已八冥轉相冥　學何故一不道
一諦盡二有無　知是諦不顛倒
謂不盡諦隨意　以故學一不說
何諦是餘不說　當信誰盡餘說
饒餘諦當何從　從何有生意識

[86]識無餘何說餘　從異想分別擇
眼所見爲著可　識若欺盡二法
聞見戒在意行　著欲黠變訟見
止校計觀何羞　是以癡復授彼
癡何從授與彼　彼綺可善黠我
便自署善說已　有訟彼便生怨
堅邪見望師事　邪黠酷滿綺具
常自恐語不到　我常戒見是辟
見彼諦邪慚藏　本自有慚藏黠
以悉知黠分別　癡悉無合黠行
是爲諦住乃說　悉可淨自所法
如是取便亂變　自因緣痛著汚
從異行得解淨　彼雖淨不至盡
是異學聞坐安　自貪俱我堅盛
自已盛堅防貪　有何癡爲彼說
雖教彼法未淨　生計度自高妙

（182 c）諦住釋自在作　雖上世亦有亂

棄一切所作念　妙不作有所作

佛說是義足經竟。比丘悉歡喜

是の時、坐中に梵志有り。名づけて猛觀と爲す。亦た大衆中に在りて、意に疑を生ずらく、「因縁を信ずや」と。佛、猛觀梵志の生ずる所の疑を知す。是の時、便ち一佛を作りたまふ。端正にして形類比ぶる無く、見る者悉く喜ぶ。三十二大人相有りて、金色にして復た光有り。法大衣を衣ること、亦た上に説けるが如し。便ち佛に向ひて叉手し、偈[87]を以て歎じて言く、

(一)[88]人各おの念ずらく「彼も亦た知る」と　各おの勝らんと欲し慧もて説く可し
能く知る有り「盡く是れ法なり」と　遍く行き求むるも隅解するすら莫からん

(二)取ること是くの如くにして便ち變[89]を生ず　「癡なり」と彼を計し、「我に善慧あり」［と計す］
「至誠の言なり」［と云ひまた］云ひて「等し」と爲す　一切是れ善なる言説なりや

(三)彼に法有りや無しやを知らず　冥にして慧無く彼の黠に隨ふ
一切に冥くば痛[90]は黠を遠ざく　念ずる所の行は悉く彼に有り

(四)先に計念せば却て行きて説く　慧已に淨なれば意は善く念ず
是れ悉く黠の減ずるを望まず　念ずる所を悉さば意に著きて止む

(84) 明本は「欲」とする。こちらは「人念ぜんと欲す」
(85) 宋・元・明の三本は「墮」。「彼の黠に墮す」
(86) 宋・元・明の三本には「諦」とある。どちらでも読めるが、文脈上、「諦」の方がふさわしいか。
(87) Cf. Sn. 878-894.
(88) 以下化仏と仏の問答の形を取る。(一)(二)(六)(八)が化仏。
(89) 變　乱。争い。事件。
(90) 痛　vedanā の訳。後には「受」が定訳語となるが、受を苦受に代表させて「痛」と訳すことも行われ、屢しば五蘊が「色・痛・想・行・識」と訳されている。

(五)我れ是れを悉くは上に据ゑず　愚は行じて轉(うた)た相
ひ牽く可し
自見すること謹にして「諦なる可し」と謂ひ
「自己は癡なり」と復た彼に受く

(六)自ら法を説きて度せんとするも及ぶ無し　自ら空
しく貪ぼり　來り盗むを以てなり
已に八冥[91]あれば轉た相ひ冥し　學[92]は何が故ぞ一な
りと道(い)はざる

(七)一諦にして盡(つ)く　二[諦]の有は無し　是の諦を知
れば顛倒せず
「盡きず」と謂はば諦は意に隨ふ　以故(かるがゆゑ)に學は一
なりと説かざるなり

(八)何ぞ諦は是れのみにして餘は説かざる　當に誰を
信じて餘説を盡くすべき
饒餘の諦は當に何にか從ふべき　何に從ひて意識
を生ずる有りや

(九)識に餘無し　何をか餘と説く　異想に從ひ分別し
て擇ぶ
眼の所見を可[愛]に著くと爲し　識の欺くが若き
は盡く二法なり

(十)聞と見と戒と意行に在るとに　著して黠を欲し變
じて見を訟ふ
校計するを止めなば何をか羞と觀ぜん　是を以て
「癡なり」と復た彼に授く

(十一)「癡なり」と何によりてか彼に授與する　彼の綺
なるは可にして善黠は我なれば
便ち自ら署(しる)さん「善く説き已れり」と　彼を訟(とが)む
る有らば便ち怨を生ぜん

(十二)邪見を堅くして師事せんと望むも　邪黠酷(はなはだ)しくし
て綺具を滿たす
常に自ら恐るらく「語到らざるか」　「我に常に戒
あれども是の辟を見るか」と

(十三)彼の諦を見て邪に藏を慚づれば　本より自らに藏
を慚づる黠有り
悉く知るを以て黠もて分別すれば　癡悉く無く黠
に合して行ず

(十四)是を諦と爲し住して乃ち説く　「悉く自ら法とす
る所を淨む可し」と

是くの如く取り便ち亂變し　自らの因縁もて痛(はげ)し　さず
く汚に著す

(去)異行に從ひ解して淨まるを得ば　彼淨なりと雖も
盡くるには至らず
是の異學は聞き坐し安んずるも　自ら貪ぼること
俱(ひと)し「我れ堅盛なり」と

(十)自己盛んにして堅く貪を防ぐに　「何の癡有る」
と彼の爲に説く
彼に教ふると雖も法未だ淨ならず　計度を生ず
「自ら高妙なり」と

(十一)諦かに住して釋し自在に作し　世に上ると雖も亦
た亂有り
一切の念を作る所を棄つれば　妙は所作有るを作

佛、是の義足經を説き竟りたまひしに、比丘、悉く歡喜しき。

法觀梵志經(93)第十二

聞如是。佛在釋國迦維羅衞樹下。與五百比丘俱。皆應眞所作已具。已下重擔。以義自證。會胎生盡。爾時十方天地神妙天。亦來禮佛。欲見尊德及比丘僧。是時第七天四天王相謂言。諸學人寧知。佛在釋國迦維羅衞樹下。從五百眞人。復十方天地神妙天悉往禮欲見尊威神及比丘。我曹今何不往見其威神。四天王即從第七天飛下。譬如壯士屈伸臂頃。來到佛邊。去尊(94)不遠。便俱往禮佛及比丘僧。

(91) 八冥　この語から考えられるのは、八邪道（邪見・邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定）を初めとして、八不正見（我見、衆生見、寿命見、士夫見、常見、断見、有見、無見）、八妄想（自性妄想、差別妄想、摂受積聚妄想、我見妄想、我所妄想、念妄想、不念妄想、念不念妄想）、八倒（非常計常　非楽計楽、非我計我、不浄計浄、常計無常、楽計非楽、我計無我、浄計不浄）等などであるが、孰れかに決定する必要は無いかも知れない。

(92) 學　有学。仏道修行者。次偈の「學」も同じ。

(93) 宋・元・明の三本は「經」を欠く。因みに『磧砂蔵』は「第十二巻」とする。

(94) 宋・元・明の三本は「尊」を欠く。

各就座。

法觀梵志經第十二

聞きしこと是くの如し。佛、釋國迦維羅衞の樹下に在（ましま）し、五百の比丘と俱なりき。皆應眞の所作已に具はり、已に重擔を下し、義を以て自ら證し、胎に會ふ生盡きたり。

爾の時、十方天地の神妙なる天も亦た來りて佛を禮し、尊德と及び比丘僧とに見（まみ）えんと欲す。

是の時、第七天と四天王、相ひ謂ひて言く。「諸の學人寧ろ知れりや。佛の、釋國迦維羅衞樹下に在して、五百の眞人を從へたまふを。復た十方天地の神妙なる天、悉く往きて禮し、尊と威神と及び比丘とに見えんと欲せるを。我曹（われら）、今何ぞ、往きて其の威神に見えざる」と。四天王、即ち第七天より飛び下ること、譬へば壯士の臂を屈伸する頃（あひだ）の如し。佛の邊りに來到し、尊を去ること遠からず。便ち俱に往きて佛と及び比丘僧とを禮し、各おの座に就きき。

一梵天就座。便説偈言

今大會於樹間　來見尊皆神天
今我來亦聽法(95)　願復見無勝衆

二梵天就座便説偈言

在是學當制意　直(96)覺行知身正
如馭者善持轡　護眼根行覺意

三梵天就座便説偈言

力斷七拔邪連　意著止如鐵根
捨世觀淨無垢　黠根明意服軟

四梵天就座便説偈言

有是身歸明尊　終不生到邪冥(97)
捨人形轉後尊　受天身稍離患

［第］一の梵天、座に就きて便ち偈を説きて言く、

今大會 樹間に於てあり　來りて尊に見ゆるは皆神天なり
今我も來りて亦た法を聽かん　願はくは復た無勝の衆に見えんことを

［第］二の梵天、座に就きて便ち偈を説きて言く、

是に在て學ばん　當に意を制すべきを　直ちに行を覺り身の正しきを知らん
馭者の如く善く轡を持ち　眼根を護り行じて意を覺らん

［第］三の梵天、座に就きて便ち偈を説きて言く、

力もて七を斷じ邪連を拔かん　意の止に著くこと鐵根の如くせん
世を捨てて觀ぜん　淨無垢なるを　黠根明かなれば　意服して軟がん

［第］四の梵天、座に就きて便ち偈を説きて言く、

是の身もて明尊に歸する有らば　終に生じて邪冥に到らず
人形を捨てて轉じて後に尊たらん　天身を受けて稍く患を離れん

是時座中。有梵志名法觀亦在大衆中。因緣所計見於泥洹脫者有支體(98)。以故生意疑信因緣。佛知法觀梵志所生疑。(183 a) 是時便作一佛。端正形類無比。見者悉喜。有三十二大人相。金色復有光。衣法大衣。亦如上説。便向佛叉手。以偈歎言

如因緣見有言　如已取悉説善(100)
一切彼我亦輕　亦或致在善緣

(95) 宋・元・明の三本は「汝」。こちらは「汝に聽かん」。
(96) 宋・元・明の三本は「眞」。「眞に行を……」
(97) 宋・元・明の三本は「因」。「是の身もて明尊に歸するに因り」
(98) 宋・元・明の三本は「脫有者」とする。こちらは「泥洹に於て有より脫する者の肢體を見る」と訓む。
(99) 宋・元・明の三本は「肢」。
(100) 宋・元・明の三本は「喜」。「喜なり」と説く。

少自知有慚羞　諍變本説兩果
見如是捨變本　願觀安無變處
一切平亦如地　是未嘗當見等
本不等從何同　見聞説莫作變
猗[101]著是衆可惡　可見聞亦所念
雨[102]出淨誰爲明　愛未除身復身
以戒攝所犯淨　行諦祥已具住
於是寧經至淨　可恐世在善説
已離諦更求行　悉從罪因縁受
亦如説力求淨　自義失生死苦
行力求亦不説　眼[103]如行亦思惟
死生無盡從是　如是慧亦如説
戒彼行一切捨　罪亦福捨遠去
淨亦垢不念覺　無沾[104]汚淨哀受
修是法度彼一　説無行爲遠欺
受如是便增變　各因諦世邪利
自所法便稱具　見彼法詰爲漏
無等行轉相怨　自見行不隨[105]汚
凡所説黠代恐　無於法有所益

無慧衆異説淨　所繫著住各堅
各尊法如聞止　演如解自師説
無法行但有言　彼所淨因一心
言如是彼亦説　一所見從淨墮
便自見怨所作　坐勝慧自大説
（183 b）所攝著求便脱　念所信無所住
本所因在好説　淨行在彼未除
觀世人見名色　以其智如受知
欲見多少我有　不從是善淨有
有慧行累無有　知亦見正以取
見無過是法行　度是亂不更受
慧意到無所至　不見堅識所覺
如關閉制所著　但行觀無取異
尊斷世所受取　取與生不應堅
靜亦亂在觀捨　在是惡哀凡人
棄故成[106]新不造　無所欲何所著
脱[107]邪信勇猛度　悉已脱世非世[108]
一切法無所疑　悉見聞亦何念
捨重擔尊正脱　不願過常來見

佛説是義足經竟。比丘悉歡喜

是の時、座中に梵志有り。法觀と名づく。亦た大衆中に在りて、計する所に因縁（よ）り、泥洹に於て脱せる者に支體有るを見る。以故（ゆえ）に意に疑を生ずらく、「因縁を信ずや」と。佛、法觀梵志の生ずる所の疑を知（しろしめ）す。是の時、便ち一佛を作りたまふ。端正にして形類無比なり。見る者悉く喜ぶ。三十二大人相有り、金色にして復た光有り。法大衣を衣ること、亦た上に説くが如し。便ち佛に向ひて叉手し、偈[109]を以て歎じて言く、

㈠因縁の如く［諸］見に言有り　已に取るが如く悉く
「善なり」と説く
一切彼も我も亦た輕んぜられ　亦た或は致して善
縁に在り
㈡自ら知ること少く慚羞有り　諍變の本に［是非
の］兩果を説く
是くの如きを見て變の本を捨て　願はくは安と觀
ぜん　變無き處を
㈢一切平かなること亦た地の如くなる　是れを未だ
嘗て當に「等し」と見るべからず
本より等しからずば何に從ひて同ぜん　見・聞・

(101) 宋・元・明の三本は「倚」。同義。
(102) 宋・元・明の三本は「兩」。註111を参照。
(103) 宋・元・明の三本は「明」。註112を参照。
(104) 宋・元・明の三本は「玷」。「沾」も「玷」も玉のきず。欠点。
(105) 宋・元・明の三本は「墮」。「汚に墮せず」
(106) 宋・元・明の三本は「城」。「故（ふる）き城を棄て」
(107) 明本は「説」。「邪を説きて［正しきを］信じ」
(108) 宋・元・明の三本は「生」。こちらは節奏が崩れるが、「悉く已に世を脱し生ずるに非ず」
(109) Cf. Sn. 895-914. 本偈は、化仏との問答という結構になっているが、すべて仏の言葉である。化仏が問うたのに対し、仏が偈全体を応えたと見るべきか。

説に變を作す莫かれ
(四)[110]猗著するは　是れ衆　惡(にく)む可し　見聞す可きも亦
た念ずる所も
[111]両(とも)に淨を出すを誰か明かと爲す　愛未だ除かず
ば　身　身を復(かさ)ねん
(五)戒を以て攝めば犯す所も淨なり　諦を行ぜば祥に
して已に具して住せり
是に於て寧ぞ淨に經(めぐ)り至らん　世を恐る可きも
「善に在り」と説く
(六)已に諦を離れなば更に行を求むるも　悉く罪に從
ひ因縁もて受く
亦た説の如く力(つと)めて淨を求むるも　自ら義失ひ生
死に苦しまん
(七)行じ力(つと)めて求むるも亦た説かず　明らかに[112]如(も)し行
ぜば亦た思惟せん
「死生無く盡く是れに從ふ」と　是くの如き慧も
亦た説けるが如し
(八)戒も彼の行も一切捨て　罪も亦た福も捨てて遠く
去り
淨も亦た垢も念覺せずんば　沾も汚も無く淨も哀
受も［無けん］
(九)「是の法を修せ」と彼を度するは一なるに　「行
無し」と説き　欺を遠ざくと爲す
是くの如きを受けて便ち變を増す　各おの諦に因
りて世邪利(まさ)る
(十)自ら法とする所　便ち「具ふ」と稱し　彼の法を
見て詰りて［「有」漏なり］と爲す
等しき行無く轉じて相ひ怨み　自ら行を見て「汚
に隨はず」［と爲す］
(十一)凡そ説く所　黠恐れに代れば　法に於て益する所
有る無し
慧無き衆　異にして「淨なり」と説き　繫著する
所は住(とど)まりて各おの堅し
(十二)各おの法を尊び聞くが如くに止まり　演ずること
解するが如くにし自ら師たりて説かば
法行無く但だ言有るのみ　彼の淨とする所　一心[113]
に因ればなり
(十三)言　是くの如くんば彼も亦た説かん　「一の所見

浄より墮せり」と
便ち自ら見て作す所を怨み　勝慧に坐りて自ら大
いに説く
(五四)攝め著する所より便く脱するを求め　信ずる所を
念ずるも住する所無し
本より因とする所は好き説に在れば　淨行在りて
彼れ未だ除かれず
(五五)世を觀る人は名色を見る　その智を以て受くるが
如く知る
多くを見んと欲すれども我が有てるは少なし　是
によらずんば善淨有らん
(五六)慧有りて行ぜば累ぬること有る無し　知り亦た見
て「正なり」と以て取り
「過無し、是れ法行なり」と見る　是の亂を度せ
ば更には受けず
(五七)慧意到らば至る所無し　堅きを見ず覺る所を識る
關閉するが如く所著を制し　但だ觀を行じて異を
取る無し
(五八)尊は世の取(114)を受くる所を斷ずれば　取の生を與ふ
るは應に堅かるべからず
靜も亦た亂も觀に在りて捨し　是れに在れば惡ぞ
凡人を哀まん
(五九)故く成れるを棄て新しきは造らず　欲する所無く
んば何をか著する所ぞ
邪信を脱して勇猛に度り　悉く已に世と非世とを
脱せり

(110) 以下第八偈まで、Sn. と偈の順序が入れ替わっている。もともと漢訳とパーリは平行経とは思えないほど隔たってはいるが、一応対応を示しておく。(四)901. (五)898. (六)899. (七)902. (八)900.
(111) 『大正』は「雨」とするが、宋・元・明の三本には「両」とある。取り敢えず「両」で訓む。「雨」は訓みづらい。
(112) 『大正』は「眼」とするが、宋・元・明の三本には「明」とある。取り敢えず「明」で訓む。「眼」を採ると、若干意味を取りづらいが、「眼の行ずるが如く亦た思惟も［行ず］」となる。
(113) この「心」は「芯」の意。
(114) この「取」は煩悩の異名。

㈢一切法に疑ふ所無し　悉く見聞するも亦た何をか念ぜん
重擔を捨てて尊は正しく脱すれば　過ちて常に來たりて見るを願はず

佛、是の義足經を説き竟りたまひしに、比丘悉く歡喜しき。